特集 新世紀を迎えますます魅力ある畜産を展開

－平成12年度畜産大賞業績発表・表彰式から－

本会では、平成10年度より日本中央競馬会の畜産振興事業として、(財) 全国競馬･畜産振興会の助成を受け、優秀畜産表彰等事業を実施している。

この事業は、わが国の畜産の各分野（経営、指導支援、地域振興、研究開発）において成果をあげ模範となる事例を広く募り選考・表彰するとともに、情報の提供により広く普及啓蒙をを行い、畜産全体のレベルアップを図ることを目的としている。

そこで今月は、１月15日に畜産関係者多数の参加のもと盛大に開催された第３回目の畜産大賞業績発表・表彰式から、審査講評並びに畜産大賞・最優秀賞４事例の業績発表について特集することとした。

■審査を振り返って

中央全体審査委員会委員長　荏開津　典生

審議講評をされる荏開津審査委員長

ただいまご紹介いただきました荏開津です。中央審査委員会では、４部門の最優秀賞のなかから畜産大賞１点を選びましたが、その経緯を中心としてお話をします。

既に皆さんおわかりいただいたと思いますが、４つの部門の最優秀賞、その他の賞を受賞された事例は、すべてその部門で非常に優れた成果を実現しておられます（別表)。それぞれの審査の過程を詳しく申上げれば、各部門の最優秀賞、優秀賞を受賞された事例がどんなに優れた成果を上げておられるかということがよくわかるわけですが、時間の制限がありますので、ここでは最優秀賞のなかから大賞を１点選ぶということだけに限定してお話を申上げます。皆様のお手元にお配りした資料のなかには、詳しいことが説明されていますので、後ほどゆっくりごらんいただければと思います。

さて、４つの部門の最優秀賞については、既にご紹介いただいたとおりです。この畜産大賞は、本年で３年目になりますが、性質の違う４つの部門、つまり、実際の畜産経営に当たられる経営者の方々、その畜産経営を外側から支援、指導しておられるさまざまな組織や機関で働いておられる方々、あるいは地域振興、畜産を中心として、地域の経済、社会の振興に大きく貢献されている事例、更に畜産発展の基礎ともなります研究開発部門、こういった非常に違う部門の最優秀事例４点のなかから１点を大賞

（別表） 平成12年度受賞事例一覧

1．畜産大賞
「黒毛和種牛における遺伝性疾患の病態解析および遺伝子診断法の確立による発病抑制技術の開発」
黒毛和種牛遺伝性疾患研究グループ
（代　表　東京大学大学院農学生命科学研究科　小川　博之）
黒毛和種の抗病性育種研究チーム
（代　表　社団法人畜産技術協会附属動物遺伝研究所　杉本　喜憲）

2　最優秀賞
（経営部門）
「高収益で大規模な個別経営体」
北海道標津郡中標津町　　鷲見（スミ）　建・希（ケン・ノゾミ）（酪農）
（指導支部部門）
「生産者が目指した酪農郷」（士幌町酪農振興協議会の活動から）
―管内全酪農経営が加入する「士幌町乳検損防システム」による効率的な指導・支援の推進―
北海道河東郡士幌町　　士幌町酪農振興協議会（代　表　富田　忠雄）
（地域振興部門）
「草資源を活かし肉用牛とともに歩む、ムラつくり」
熊本県阿蘇郡産山村　　上田尻牧野組合（代　表　井　国興）
（研究開発部門）
「黒毛和種牛における遺伝性疾患の病態解析および遺伝子診断法の確立にる発病抑制技術の開発」
黒毛和種牛遺伝性疾患研究グループ
（代　表　東京大学大学院農学生命科学研究科　小川　博之）
黒毛和種の抗病性育種研究チーム
（代　表　社団法人畜産技術協会附属動物遺伝研究所　杉本　喜憲）

3　優秀賞
（経営部門）
「女性でもやれる肉用牛繁殖100頭経営」―合理的経営で若者の夢を実現―
宮崎県都城市　前田　美雪（肉用牛繁殖）
（指導支援部門）
「酪農家の活力を生み出して発展する産地」―酪農王国を支えるみどり牛乳農業協同組合―
愛知県半田市　みどり牛乳農業協同組合（代　表　伊藤　敏之）
（地域振興部門）
「レディ―スファ―ムスク―ルによる酪農振興」
北海道上川郡新得町　新得町立レディースファームスクール（代　表　斎藤　敏雄）
（研究開発部門）
「飼料用フィターゼの開発と豚・家禽におけるリン排泄量の低減技術」
フィターゼ開発グループ　　（代　表　桜井　季）
フィターゼ基礎研究グループ（代　表　斎藤　守・武政　正明）
フィターゼ実用化グループ　（代　表　高木　久雄）

4　特別賞
（経営部門）
「地域資源の活用と先進技術で築く、雇用型大規模畜産経営」
大分県日田市　木川　角重（酪農・肉用牛生産）

として選ぶということで、その比較はなかなか難しい問題があります。このことは、この賞の最初からいろいろと議論の種になっている問題でありますが、あえてこのなかから１点を選んで大賞を差上げるということにも大きな意義があるということでスタートしたわけで、中央審査委員会では、それぞれの部門ですばらしい成果を上げておられることをじゅうぶんに認識した上で、大局的な観点というか、総合的な観点からみて、日本の畜産、ひいては世界の畜産の発展に対する貢献が最も大きいと思われる

業績発表をされる黒毛和種牛遺伝性疾患研究グループの小川さん

１点を選ぶという作業をしているわけです。

本年度の畜産大賞は研究開発部門の最優秀賞で、「黒毛和種牛における遺伝性疾患の病態解析及び遺伝子診断法の確立による発病抑制技術の開発」となりました。これは、２つのグループの非常に多くの方々がこの研究に当たられたわけですが、その中心になられたのは、１つのグループは、小川博之氏を中心とする東京大学のグループで、黒毛和種牛遺伝性疾患研究グループです。もう１つのグループは、杉本喜憲氏を中心とする糞畜産技術協会の附属動物遺伝研究所のなかにある黒毛和種の抗病性育種研究チームです。この２つのグループと研究チームが協力してこの研究に当たられ、すばらしい成果を上げられたということです。

まず、大賞の中身について私からご説明をしますと、この研究の内容は極めて専門的なことになるので、例年とは少し違って、私はごく簡単にこの研究のもつ大きな意義について話をさせていただいて、研究の詳細な専門的な内容については、後ほど研究に当たられた方々からのご発表をお聞きいただき、ご理解いただきたいと思う次第です。

この部門の研究は、和牛、特に高級な和牛肉の生産にとって非常に大きな問題である遺伝性疾患を避ける上で非常に大きな技術的な、あるいは科学的な貢献をされたということです。高級和牛肉というものは世界に冠たる牛肉です。これは申上げるまでもなく、皆さんご承知のとおりであって、私も知る限り、これ以上の良質の牛肉は世界に存在しないことは申すまでもないと思います。それと同時に、和牛飼育ということが日本の中山間地域の地域振興に非常に大きな役割を果たしています。また、高級の和牛肉を材料とします食文化というのは、日本の食文化の中心をなしているといっても過言ではないと思います。ただ、ここの大きな問題は、肉質を追求する結果として、いい系統の親牛をずっと追求していく結果、どうしても系統の近い近親交配が重なってくるということは避けられない問題です。この近親交配の頻度が高まってくると、どうしても遺伝性の疾患が重大な問題として浮かび上がってくるわけです。この遺伝性の疾患に対する対策ということですが、この２つの研究グループは、生産現場でこれまでずっと問題になっていたいくつかの疾患について、疾患病態の詳細な解析と家系調査によって、遺伝性の疾患としてこれをとらえ、その原因となる因子、これは遺伝子の異常ですが、これを明らかにするという手順で研究を進められた。遺伝子の異常を明らかにされた後、この情報に基づいて、簡単で正確で、かつコストが余りかからない診断法、この遺伝子診断法を開発された。そして、これまでに黒毛和種で認められた５つの遺伝性疾患について、病態解析、原因となる遺伝子異常の解明、遺伝子診断法の開発を成し遂げられた。それぞれに特許をとられたり、出願されたり、研究成果を国際的な学術雑誌に掲載されて、高い評価を受けておられます。

この２つのグループは、黒毛和種における不良因子問題のもつ重要性を認識し、関係者の理解を得ながら研究を進めてこられ

た。一方で、ウシゲノム解析のためのツール開発、ウシゲノム解析をどうやってやったらいいかという基礎的な研究に対しても非常に大きな貢献をされた。同時に、もう一方では、地道にいろいろなサンプルを集められ、牛の病気の遺伝学的な解析をしてこられた。この両面からの研究が相まって、ウシゲノム解析研究の飛躍的な発展と黒毛和種牛の遺伝性疾患の遺伝子診断法を確立し、不良因子をコントロールしつつ、牛の改良を進めるということが可能になった。それから、遺伝的な多様性、つまり特定の系統にだけ偏らないで、できるだけ多様な系統の遺伝子を維持していくということにも大きな貢献があったということです。

その学術的、専門的な詳細は、後ほどのご発表によって明らかにしていただきたい。皆さんにもよくご理解いただきたいと思いますが、以上のことを考慮して、黒毛和種という、いろいろな意味で日本の畜産にとって非常に重要な部門の維持、発展にとってたいへん大きな学術的な貢献をされたということで、本年度の大賞は、４つの部門の最優秀賞のなかから、この学術的な研究を行われた研究開発部門に差上げたいということになったわけです。

次に、他の部門の最優秀賞について、ごく簡単にご説明をさせていただきます。

経営部門の最優秀賞は、北海道の中標津町で大きな酪農経営をやっておられる鷲見健さん、希さんです。これは、130ha に近い広大な草地の上で、経産牛170頭を超えるたいへん大型の酪農経営を鷲見さんは営んでおられます。フリーストール・パーラーという一番新しい形式であるのみならず、その他にも省力化のためのさまざまな工夫をされて、なおかつ平均乳量が9000kgを上回るというすばらしく高い生産性を上げておられ、かつ、非常に牛乳の生産コストが安い、生産のコストダウンという面でもすばらしい成果を上げておられる経営です。更に、北海道の広い草地をじゅうぶんに活用され、粗飼料の完全自給。これは日本の酪農業にとってたいへん大きな課題ですが、長年、粗飼料の自給ということがいわれながら、なかなか実現しがたいなかで、粗飼料の完全自給をしておられるという点も、高く評価される点です。

また、この経営の発展の過程で極めて計画的な投資、堅実な資金管理というような点を貫いておられて、財務的にみても非常にすばらしい堅実な経営です。つまり、技術的な面、規模の面、財務、経営の面のどの面をとりましても、日本の大型草地酪農の模範であると申して差支えない最優秀の事例です。大賞は残念ながら１点だけですので、大賞は差上げられませんが、決して性質の違う大賞に比べて劣るというようなわけではありません。

次に、指導支援部門ですが、同じく北海道の士幌町酪農振興協議会、これは富田忠雄さんがこの協議会を代表しておられるわけですが、士幌町酪農振興協議会は、指導支援部門としては１つの大きな特色があります。それは、酪農家ご自身がつくって運営しておられる組織であるということです。通常、指導支援に当たられる方々は、ご自身で酪農やその他の畜産業を直接経営しておられない、外側からそれを支えるという

業績発表をされる士幌町酪農振興協議会代表の富田さん

場合が多いわけですが、士幌町酪農振興協議会、士幌町で酪農をやっておられる100戸に近い酪農家ご自身が自分でそういう組織をつくられて、いろいろな酪農発展のための指導支援、乳検事業、ヘルパー事業、このように酪農経営を外から支える活動を酪農家ご自身の組織でやっておられる。そして、すばらしい成果を上げておられるという点が非常に高く評価され、この部門の最優秀賞になったわけです。

この場合、酪農家ご自身でつくられた組織ですので、農協をはじめ、酪農を取巻く関係のいろいろな団体との間に一種の対立というか、競争関係もあるわけです。これを悪い意味での対立にしないで、いい意味での競争、一種の緊張感を伴って競争すると同時に、協力するという形で、酪農家と酪農を取巻く関係のいろいろな各方面との間に連携体制を非常にうまく確立させた。そういう意味でも、大きな特色を持ち、かつ、すばらしい成果を上げておられる組織です。

最後に、地域振興部門ですが、阿蘇の上田尻牧野組合、組合長さんは先ほどごあいさつされた井国興さんです。ご承知のとおり阿蘇の入会地の土地利用というのは、この草資源はたいへん重要な資源ですが、土地の権利調整に非常に難しい問題があります。この権利調整の上に立って、長い間、阿蘇の入会地の草資源を利用してこられた。と同時に、今は、あか牛の経営が非常に難

業績発表をされる上田尻牧野組合代表の井さん

しくなっていることは、皆さんご承知のとおりだと思いますが、あか牛の経営の維持に取組まれて、粗飼料の多給によるあか牛の肥育という非常にすばらしい成果を上げておられます。

また、現在では、農業、畜産、いずれも単に生産するだけではなく、これをいかに消費者と結びつけていくか、マーケティング、流通というような面が非常に重要になっていることはご承知のとおりです。この組合では、愛知県の犬山市にある食品会社と産直の契約を結ばれて、あか牛の肉を消費者に結びつけるという面で成功されたのみならず、この食品会社を通じて、消費者と直接いろいろな結びつきを深められた。また、更に地元におかれては、牛肉だけではなく、米、ホウレンソウ、お酒や焼酎、ビールといったようなものにまで経営の多角化を図られて、草資源の利用、あか牛の経営発展という畜産を中心としながら、地域の社会、経済の発展のためにたいへん大きな貢献をされてきたすばらしい事例です。私どももご説明を受けて、最優秀賞に値するすばらしい実績を上げておられることをじゅうぶんに理解したわけです。

以上、大賞以下３つの部門の最優秀賞に返って、簡単にご説明させていただきました。時間の関係で省略させていただきますが、最優秀賞にはならなかった優秀賞、その他の賞を受けられた方々も、日本全国のトップに位するすばらしい実績を上げられ

た方、事例ばかりです。

　このようなすばらしい事例が更に普及していくことを通じて、日本の畜産の発展にこの畜産大賞がいくらかでも貢献することを希望して、簡単ですが中央審査委員会、その他の審査委員会を代表しての審査講評を終わらせていただきます。

（千葉経済大学・教授）

＜本稿は式典の審査講評の要旨を編集部がまとめたものである＞